一般の部　佳作

黒い沼

中川 美沙（東京都国立市）

「あのね」こどもの小さな声がゆれている。

「ぼくね、きょうおともだちに、死んじゃえって言われたの。だから、しかえしに、たたいたんだ…」こどもの目から涙、ぽろり。

「そしたら、バン、って、おもいっきり頭けられたの、いたかった。昨日もやられたよ」

わたしの心に、小さな黒い沼、うまれる。

さっき、スーパーでそのおともだちの母親に会ったのだ。挨拶をしたら、目をそらされた。

黒い沼、ざわり、波立つ。

悪いのは、そっちじゃないか、悪いのは、そっちだ、悪いのは、悪いのは…。

こどもが泣いている。しゃくりあげる音が、耳鳴りのように、ひびく。やまない。

こぶしを、ぎゅっとにぎりしめる。

目をそらした、その母親の顔がちらつく。
けりかえしてやれ！　その言葉を、奥歯でかみきる。のみこむ。黒い沼は、油みたいに闇を吸ってひろがってゆく。わたし、どろり、おぼれる。しずんでゆく。奥が深い。どこまでも深い。息ができない。その先につながる黒い海を見る。
あまたの人間が、うごめいている。もがいている。言い合う声、むせび泣く声。
バン。銃声がきこえる。闇に、炎が見える。傷つき、叫ぶ声がきこえる。
穴からはいあがる。
息をする。ただ、息をする。いけない。あそこにいっては、いけない。
目をあけると、こどもがわたしを見つめている。しずかにだきしめる。
黒い沼が、ゆっくりと小さくなっていく。
もう一回、深く息をすう。
「ねえ、あのね」
ことばを、しんじる。よきことばを、しんじる。よきじぶんを、あいてを、しんじる。
いつのまにか黒い沼は消えている。
沼のあとに、小さな緑の芽、ぽつりと。